

#### ④ 5日目（1月17日）

### グレン・エレン散策と第39回J・ロンドン生誕記念パーティ

芳川 敏博（京都府城陽市）

#### I はじめに

約1年半前に「第8回ジャック・ロンドンへの旅」に参加させていただき、ジャック・ロンドンについて多くのことを学びましたが、今回の旅行でも違った視点からの研究につながることを期待しています。今回は北村さんと一緒にサブ・リーダーとして微力ながらお手伝いができ、あらためて辻井先生のご苦勞を再認識し、ご配慮に感謝しております。

今回の旅が大成功のうちに全員無事に帰国できたのは、辻井先生の「旅」のモットーである1) 他人と協調する姿勢、2) 各自の役割を守ること、3) 他人への思いやり、のおかげであると確信をしています。上記のタイトルに関して得た情報や感じたことを皆様方と Share（共有）したいと思います。

#### II グレン・エレン村散策



グレン・エレンが作品の舞台に採用されたのは1906年出版の『鉄の踵』で、強大な権力からの逃避の場所として描かれていると、小林一博氏は述べておられます。（『読み解かれる異文化』の「ジャック・ロンドンとカリフォルニア」p.188）ジャック・ロンドンは、サンフランシスコの北方約60キロ離れたソノーマ谷のこの地に、ゴールド・ラッシュがすでに終結しており閉塞感が漂う1905年から永眠するまでの1916年まで生活し、作家活動、冒険、農業の拠点としました。1905年8月2日のロンドンの手紙に、「田舎ほどよい所はない」と言っているように、彼はグレン・エレンをととても気に入ったようです。1905年は、大学連合社会主義協会の初代会長に選ばれたり、最初の奥さんとの離婚交渉が難航するなか、やっと離婚が正式に成立し、チャーミアンと結婚するなど、ロン

ドンにとっても、転機となる時期でした。

2000年のアメリカの国政調査によりますと、グレン・エレンの人口は992名で世帯数は387です。人口の89.42%が白人で、以下、1.92%が黒人、1.21%が原住民、1.21%がアジアからの人々、0.40%が太平洋の諸島からの人々、となっています。現在グレン・エレンの多くの住民は3世や4世で、大半はワイン産業に従事しています。

また、生命の源泉であり、神が宿ると一般的に言われている森に囲まれ、ロンドンだけではなく、多くの人々のあこがれの地であった現在のグレン・エレン村をご紹介します。ホテルのジャック・ロンドン・ロッジの近くにあるヴィレッジ・マーケットの庭でブランチ（朝昼兼用食事）を楽しんだ後、辻井先生の案内で、このように歴史あるグレン・エレン村を散策し、ロンドンが住んだ20世紀初頭にタイムスリップしました。

まず最初、小川の上に架けられた1939年に造られた橋を渡り、郵便局や雑貨店を見学し、村人たちが住む森とフェンスに囲まれた家が多い地域を散策しました。その途中で、ジャック・ロンドンとチャーミアンの最初の家（1906年）である **Wake Robin Lodge** のような家（実際には、そうではありません）に遭遇しまして、当時のロンドン夫妻の生活を想像しました。もどって来る途中、1894年設立の **Glen Ellen Community Church** と言われる教会がありました。ロndonは、基本的には無神論者ですが、キリスト教には興味を持っており、当時、この教会で礼拝をしたのかな、と思いは巡りました。村の散策の終わりころ、日本の田舎の家のようなものを見つけ、日本人が住んでいるのかなと想像していたのですが、郵便局員によると、その家は日本人以外の人たちが住んでいることが分かりました。グレン・エレンの自由な雰囲気に触れた瞬間でした。

その後、以前はグレン・エレン・ワイネリと言われていたらしいのですが、ジャック・ロンドン州立史蹟公園への途中にある **Benziger Family Winery**（ベンジガー・ワイネリ）を見学に行きました。そこで、キングマンゴ夫妻が経営されておられたブックストアにあったロンドン関連の資料の約半分が保管されている（その他は、チャーミアンがロンドンの死後生活した「幸せの壁の家」に保管されています）建物を見ることができたことは、幸運なことでした。その上、ブドウ畑を専用のガイドとともにバスツアーに参加できました。（夕方からのJ・ロンドン生誕記念パーティのスピーチに備えなければならない辻井先生に全員申し訳なく思っています）青天の下ワイネリを他の観光客とともに、十分に楽しみ、リフレッシュすることができました。ガイドは、良質のワインのできる条件として、1) 温暖な気候、2) 朝霧、3) 乾燥している空気、4) 適した土壌、を指摘していました。ジャック・ロンドンがサンフランシスコで生まれ、オークランドで成長し、グレン・エレンで作家としての地位を不動のものにし、極北の地への冒険やハワイへの静養の旅をしたロンドンにこのような地域による環境の差が、どのような影響を無意識のうちに与えているのか、興味深いところです。

### Ⅲ 第39回J・ロンドン生誕記念パーティ



ジャック・ロンドンは1876年1月12日に、615 Third Street, San Francisco の貧民街で生まれ、1916年にグレン・エレンで亡くなる頃には世界で最も高給取りの作家になり、その後も作品は世界中で翻訳され、多くの人々に影響を与えています。この旅の1日目にロンドンの生誕の地を訪問しましたが、1906年のサンフランシスコ大震災でロンドンの生まれた家は跡形もなくなり、現在では再開発が進行し当時の雰囲気はほとんど見られません。しかし、そこから少し歩くと、South Park を横切る Jack London Alley (ジャック・ロンドン小路) があり、庶民の人が触れ合う雰囲気がありました。その場所は、以前は Center Street と呼ばれていましたが、近くに住んでいたロンドンの偉大さに敬意を称して現在は Jack London Place (ジャック・ロンドンゆかりの地) と改名されています。

ソノーマ谷に拠点を置き、高校生の作文コンテストの主催や研究活動などを推進している Jack London Foundation (ロンドンが生まれたちょうど100年後の1976年にキングマン夫妻により設立) 主催の第39回J・ロンドン生誕記念パーティ (ロンドンの133歳の誕生パーティ) が、2009年1月17日 (土) 午後7時から9時まで、私たち日本からの10名を含め約110名の参加者の出席のもと、Santa Rosa 市の Quail Inn で盛大に行われました。(ロンドンの自伝的小説である『マーティン・イーデン』の出版100周年でもあります)

まず最初に、司会者で財団の理事長である Rudy Ciuca 氏が財団の現状を話されました。基金集めのために行ってきたジャック・ロンドン・グッズなどのオークションが今回 (パーティに先立ち行われました) で品不足のため最後になり、今後の財政上の問題を指摘されました。

次に2009年の Jack London Man Of The Year 賞 (辻井先生も、森先生も、Labor 先生も受賞されています) の授賞式がありましたが、当人の Dick North さんが体調が悪いので欠席されました。その代役として、オークランド市にある The First And Last Chance

Saloon の第3代オーナーであるキャロル・ブルックマン氏が彼のスピーチを代読されました。North氏は極北の地にあった Jack London Cabin をオークランドに持ってくるのに力を尽くされ、約25年前に Dawson City に The Jack London Interpretative Center を設立され、*Sailors on Snowshoes, Tracking Jack London's Northern Trail* を出版されました。

その後、ジャック・ロンドン高校生作文コンテストの優勝者 (Aaron Peterson 君、Santa Rosa 高校生) の表彰・スピーチがあり、次に Daniel Wichlan 氏 (『Jack London – The Unpublished and Uncollected Articles and Essays』の著者である) が昨年のロンドン研究の現状について話されました。ご自身の最新の著書である *The Complete Poetry Of Jack London* や Jeanne Campbell Reesman 氏の *Jack London's Racial Lives* をはじめとする著書や、現在進行中の Earle Labor 氏のジャック・ロンドンの伝記をまず紹介されました。その他、4つの重要なジャック・ロンドンに関する論文が提出され、インターネット上でも *The World Of Jack London* など、いろいろジャック・ロンドンと彼の作品が話題になっていると話されました。インターネットの英語の検索サイトで Jack London を検索すると約400万のページが表示され、これは他の有名な作家を圧倒しているとの指摘がなされました。

次にくじ引きがあり、広島西美恵子さんが原書の *The Sea Wolf* (『海の狼』) を手に入れました。最後に (Last but not least)、我らが日本ジャック・ロンドン協会の名誉会長であり、ジャック・ロンドン財団の顧問でもある辻井栄滋先生が、ゲスト・スピーカーとしてユーモアたっぷりに聴衆を引きつけ堂々と約15分間、*Since January 19, 2002* というタイトルでスピーチをされました。今回のジャック・ロンドン財団での辻井先生のスピーチは4回目で、多くのアメリカの友人や日本からの声援や拍手をうけ、アルコールを控えてジョン・バーリコーンに打ち勝ちました。その見事なスピーチも以前から準備され、旅行中も時差と強行日程と飲酒にもかかわらず練習を続けられた熱心さが、辻井先生のスピーチを完璧なものにしたと確信しています。(Practice makes perfect.) (辻井先生は感性豊かで、「泣き虫先生」として知られていますが、今回は辻井先生ではなく、感動のあまり私が「泣き虫先生」になってしまいました!) 辻井先生のスピーチはタイトルからも想像できますように、2002年1月19日以降の辻井先生と日本のジャック・ロンドン研究などについてのものでした。その概略は以下の通りです。

- 1) 今回は9名をジャック・ロンドン農園を約3時間半かけて案内した。20回以上の農園散策である。
- 2) 2002年6月に『白牙』を翻訳。2004年5月、Centenary College of Louisiana から文学博士号を授与される。2005年5月、『二十世紀最大のロングセラー作家—ジャック・ロンドンって何者?』を出版し、英文での発行を期待している。2005年10月と2006年4月に決定版ジャック・ロンドン選集全6巻を出版した。
- 3) 2006年9月、アメリカの母でもある Winifred Kingman さんが永眠され、たいへ

ん悲しい思いをしている。キングマンさん夫妻の激励と手助けのおかげで、ロンドンの作品を翻訳できて感謝している。Laborさんが病気のために今回のパーティでお目にかかれぬのは寂しく、残念である。

- 4) 2007年5月、Ms. Carol Brookmanさんが来日され、日本ジャック・ロンドン協会の会員と奈良を案内した。
- 5) 昨年の6月に日本ジャック・ロンドン協会の会長職を辞し、現在は名誉会長となっているが、今までとほぼ同様の活動をしている。今回9回目となる「ジャック・ロンドンへの旅」もそのひとつである。今回は9名が日本全国から参加し、このパーティに出席している。
- 6) 日本ジャック・ロンドン協会のその他の活動としては、年1回の総会があり、昨年は第16回目で73名が出席した。3つの支部があり、年2・3回会合を開き、ロンドンの作品を読んだ後に意見を交換したり、報告したりしている。ほぼ毎年、ジャック・ロンドン作品のエッセイ集を発行しており、最近のものとしては、ロンドンのボクシング小説に関する第6号を発行した。今年は、『ジョン・バーリコーン』に関するエッセイ集を発行したいと考えている。
- 7) 日本ジャック・ロンドン協会外でも、この25年間、ロンドンの再評価が進行している。最近の例としては、東京大学の柴田教授がロンドンの短編集の翻訳本を出版しており、その他の教授も同様の翻訳本を世に出している。
- 8) 最後に昨年の11月に出版した『ジャック・ロンドン カリフォルニア紀行』という1987年からの20回にわたるベイ・エリア訪問の雑誌寄稿記事をまとめた地図と写真付きの本を、ジャック・ロンドン財団に寄贈する。
- 9) 今回、皆様にお目にかかれて、いろいろなことを報告でき、たいへんうれしく思っている。また近い将来皆様にお会いできる日を楽しみにしている。

#### IV 個人的な現地の人との交流



今回の「第9回ジャック・ロンドンの旅」に第8回に引き続いて参加した動機は、前回の旅で Wolf House Restaurant でジャック・ロンドン財団の Rudy さんや Joe さんをはじめ数名の人と夕食をともにしたことにありました。その時に、日本のジャック・ロンドン研究をはじめ、日米のコミュニケーション・ギャップについて話が盛り上がり、それ以降も Joe さんとは今回のパーティ参加のことで親しく、メールの交換をしました。

その他、前回の「旅」で酒場やメジャー・リーグの試合に招待していただき、昨年夏に来日されたときに案内をしました Carol さんと Elliott さんにもぜひ、もう一度アメリカでお会いしたいということも今回の「旅」参加の大きな要因でした。今回は J・ロンドン広場近くのレストランで昼食をともにできたことは、とてもよい思い出となりました。(今年また、お二人は日本にいらっしやりたいようです)

また、私が購入した本がきっかけで、インターネットでのメールの交換が深まり、ぜひアメリカで直接あって話をしたいと思った人たちもいました。それは、*The Wit and Wisdom of Jack London – A Collection of Quotations from his Writing and Letters* の著者である Ms. Margie Wilson と *Jack London's Klondike Adventure* の著者で 2005 年の Jack London Man Of The Year 賞を受賞されている Mr. Mike Wilson です。当日受付をしていて私だと分ると Margie さんは私を熱烈に迎えてくれました。Mike さんも、たいへん誠実かつ謙虚な方で、私を励ましてくださいました。

その他、Rudy さんの姪である Patty さんは忙しいなか、当日、私たちを車でご親切に送迎してくださいました。また、パーティでお会いした何人かの人と、私が主張するジャック・ロンドンの後期の作品の精神主義傾向とその再評価に関して意見が分かれ、もう少し時間と私に説明能力があればよかったのにと悔やみました。

会場が Santa Rosa であったので、鹿児島との交流のあったアメリカ人女性 2 人が「Mori Takaharu!」という叫びながら私の方にやって来られたので、鹿児島からの参加者である鎌田さんを紹介しておきました。

私はジャック・ロンドン財団の会員でもあるので、このようにジャック・ロンドン関係の人たちと直接、お会いして交流できたことはとても有意義なことでした。特に、Joe さんと Elliott さんの口利きで、最近では公開されていないジャック・ロンドンとチャーミアンの家である Cottage を内部まで説明つきで案内していただき、とても感謝しています。(前回の「旅」では残念ながら、見ることはできませんでしたので。)

ジャック・ロンドンとは人々と交流することが好きで、あの「狼城」のダイニング・ホールは 50 人が座れるように設計されていました。このような精神で、国や文化の異なる人々がジャック・ロンドンという人物を中心に集まる場があるのは、とてもすばらしく、ロンドンの偉大さと影響力の大きさを再認識しました。